

授業改善イメージ①

(社会への関わり方を選択・判断する/
4年 ごみ処理と利用)

普通の社会科授業

【導入】

- T: 今日から「ごみ処理と利用」について学習していきます。これは福島市で配られている「ごみの出し方」です。(資料を提示)何か気付いたことはありますか?
- C: ごみには「燃えるごみ」と「燃えないごみ」, 「資源物」があるね。
- C: ごみは指定された袋に入れて出さなければならぬんだね。
- C: 住んでいる場所によってごみを集める曜日が違うみたいだよ。
- T: ごみ処理の仕方には何か工夫がありそうですね。これからごみ処理の工夫を調べていきましょう。

※単元で問題を解決する必然性がない。

【展開】

- T: 明日、福島市の清掃工場を見学に行きます。質問することを考えましょう。
- C: 1日にどのくらいのごみが運ばれてくるのか質問してみたいな。
- C: 清掃工場は福島市内に何か所あるのかな。
- C: 資料で調べた時に、1日に運ばれてくるごみの量も、清掃工場の数も書かれていたよ。
- C: では、何を質問すればよいのかな。

※必要感がないまま見学に行くことになる。

【終末】

- T: これまで調べてきた「ごみ処理の工夫」を社会科新聞にまとめます。「燃えるごみの処理」「燃やした後の工夫」「ごみ処理の問題点」「資源物の再利用」の4つのポイントでまとめます。では、グループになって、分担を決めましょう。
- C: ぼくは「燃えるごみの処理」をまとめたいな。
- C: わたしは「燃やした後の工夫」を担当するね。
- ～表現活動～
- T: 今日はグループごとにまとめた社会科新聞の発表会をします。Aグループから発表しましょう。
- C: ぼくのグループの発表をします。福島市の「ごみ処理のみみつ」は4つあります。
- (中略)
- C: 何か質問はありませんか。
- C: ……。

※全員が同じ場所に見学に行き、同じ観点でまとめるように指示されているため、対話的な学びにならない。

これから目指したい社会科授業

【導入】

- T: 福島市の水道水はおいしいことが分かりましたね。
- C: そうだよ。福島市の水道水は「モンドセレクションで最高金賞」を受賞しているのだから。
- C: 福島市は森林がたくさんあるから、自然が水をきれいにしてくれると学習したよ。
- C: それだけではなく、ダムや浄水場で働く人たちの努力があるから安全で安心な水を飲めるんだよ。
- T: 自然や人々の努力のおかげで、くらしやすい福島市になっているのですね。これは今朝の福島市内の写真です。(ごみの収集場所の写真を提示)
- C: 街中はごみも少ないし、きれいだね。
- C: 夏休みに旅行に行ったけれど、都会の方はごみがたくさんあったよ。福島市は水もきれいで、ごみも少ないから、くらしやすい場所だね。
- T: これは1人当たりのごみの量を表した資料です。(1人当たりのごみの排出量の資料を提示)
- C: えっ! 日本でいちばんごみを出しているの?
- C: それなのに街中がきれいだということは、ごみをきれいにするためのひみつが必ずあるはずだよ。

【展開】

- C: 1日に出るごみが多いのは分かったけれど、2か所の清掃工場で街中をきれいにできるのかな?
- C: 通学する時にごみの収集場所を見ているけれど、場所によってごみの量が違うよ。どの場所もきれいだということは収集車の走るルートや大きさ、収集する回数などに工夫があるんじゃないかな。
- C: 福島市で処理しきれなくても、となりの市町村と協力して処理していることも考えられるね。
- T: 今日話し合っただけで分からなかったことも工場を見学したり質問したりしたら分かるかもしれないですね。

【終末】

- T: 清掃工場や市役所の人たちの話を聞いて、ごみの多い福島市の街中がきれいな理由が分かりましたね。
- C: 「ごみ処理のみみつ」はぼくたちだけが知っている意味がないから、図や表を入れたポスターにして学校に貼ったり、家庭に配付したりしてみようよ。
- C: そうだね。ぼくはそのポスターをもとに、運動会のお昼の休みを使って、地域の人に呼びかけたいな。
- ～表現活動～
- T: もっとくらしやすい福島市にするために、できることがありそうですね。考えをまとめてみましょう。
- C: わたしはごみを出さないように生活したいな。
- C: 必要のない物を買わないことも大切だね。
- C: 学校でプラタブを集めているから、協力しよう。

単元の導入の工夫

【問題解決を促すための、単元を貫く問い】

社会科でも単元で資質・能力を育むことが重要となります。導入で問題解決の必然性をもつことができるように、子どもたちを導いていくことができるかが、単元の学びを充実させるためのポイントだと言えます。前単元とのつながりを意識せず、教師が「今日から……。」と単元の課題を与えるような導入を行ってしまうと、単元で問題を解決する必然性が生まれず、子どもの主体的な学びは実現しません。

本小単元は「人々の健康や生活環境を支える事業」という点で、前小単元の飲料水の学習とつながっています。それを踏まえて、単元全体で問題を解決したいと思うことができるような問いを見いだすことができるように、授業をつくる必要があります。それは子どもたちが見通しをもって単元の学びを進めていく上でも、とても大切なポイントとなります。

【認識のずれを生み出すための教材】

子どもが単元を貫く問いをもつことで、問題を解決するための必然性を感じながら学びに向かっていくためには、子どもたちがもっている社会認識とずれが生じるような社会的事象との出会いが必要です。子どもたちは前小単元で「モンドセレクション最高金賞」を受賞するほどおいしい水道水により、わたしたちのくらしは支えられているという学びをしています。くらしやすい地域に住んでいるという社会認識をもっている子どもたちだからこそ、福島市の一人当たりのごみ排出量が全国最多になった事実と出合わせます。子どもたちの生活経験の中には、街中にごみがあふれているという感覚がないため、そこには認識のずれが生じます。計画的なごみの収集やごみの焼却、他の公共団体との連携等、子どもたちは自然と、わたしたちのくらしを支えるひみつに問いを見いだしていきます。

単元展開の工夫

【必要感のある見学学習にするために】

学習指導要領の第4学年の目標には「(見学や観察、聞き取りなどの)調査活動、地図帳や各種の具体的資料を通して」調べることが示されています。しかし、実際の教育現場では、見学学習の意味が形骸化し、遠足感覚で見学に行く状況も多いように思われます。

見学学習に行く際には、子どもたちの中に「どうしても実際に見たり聞いたりして調べないと分からないし、確かめられない。」という必要感がなければなりません。見学学習に行く必要感もない上に、質問したいことを学級で深め合わないままに行ってしまうと、同じような質問が繰り返され、表面的で質の低い学びになってしまいます。

【社会的事象の見方・考え方を働かせた対話的な学び】

対話的な学びとは、子どもの発言が多ければよいというものでも、グループ活動を取り入れればよいというものでもありません。社会科の目標に向けた深い学びが実現するような対話が求められます。その鍵となるのが「社会的事象の見方・考え方」です。学習指導要領では「位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係に着目して捉え、比較・分類したり統合したり、地域の人々や国民生活と関連付けたりすること」を「社会的事象の見方・考え方」として整理されています。社会的事象の見方・考え方を働かせる子どもの姿を見取り、それを価値付けたり、広めたりしながら、深い学びを生み出していくことが大切です。

単元終末の工夫

【単元の学びをまとめる表現活動】

社会科の単元終末の表現活動として、これまでよく行われてきたのが「新聞づくり」です。子どもたちが新聞に表すことのよさを感じながら、表現する最善の方法として「新聞づくり」を選択し、これまでの学びを整理し、読み手を意識しながら表現するのであれば、それは大切な表現活動であると言えます。

他にも、カルタにまとめたり、関係図にまとめたりするなど、発達段階に応じてさまざまな表現活動が想定されます。大切なことは、教師が表現方法を選ぶのではなく、子どもが必要感をもって選ぶことです。そうすることで、子どもたちは主体的に学びへと向かっていきます。

【社会への関わり方を選択・判断する】

学習指導要領の内容の取り扱いの中で、新しく「社会への関わり方を選択・判断できるよう配慮すること」と示されています。しかし、全ての内容に規定しているわけではありません。同時に選択・判断と聞くと、AかBかを選ぶような二項対立的な終末を想起しがちです。ここで言う選択・判断とは、あくまで社会への関わり方を選択・判断するということであり、社会の一員として、自分にできることを選択・判断することが大切です。つまり、学習したことを基に、自分たちに協力できることなどを選び出し、自分の意見や考えとして決めるなどして、判断することです。公的資質の基礎を育成する教科である社会科において、教師は主体的に社会に関わろうとする態度をしっかりと見取り、評価していきたいものです。

普段の社会科授業

【導入】

- T：これは東日本大震災の写真です。
C：水道が出なくなって、停電が続いたと家族から聞いたよ。
C：体育館が避難所になって、市役所の人が食べ物を配っている写真を見たことがあるよ。
T：東日本大震災で、わたしたちの暮らしには大きな被害が出ました。地震から暮らしを守るためにはどうすればよいのでしょうか。

※県内で発生した特定の自然災害に限定しており、自然災害と国土の自然条件との関連を捉えるための単元構想になっていない。

【展開】

- T：地震から暮らしを守るための取り組みにはどんなことがあるのかを話し合ってみましょう。
C：福島県では防波堤をつくって、津波の被害に備えているね。
C：福島市では住民に緊急メールを送ったり、ハザードマップを作成したりしているよ。
C：わたしの地域では、防災訓練を行っているよ。
C：ほく家では避難リュックを準備しているよ。
C：ボランティア活動も他の地域と助け合う上で大切だと思うな。

※第4学年「自然災害から人々を守る活動」のねらいとの違いが意識されていない。

【終末】

- T：地震から暮らしを守るためにはどうすればよいのかを調べることができましたね。わたしたちにできることは何でしょうか？
C：わたしは家族と、地震が起きた時にどこに逃げるのかを話し合いたいな。まずは自分の命を自分で守ることが大切だと思う。
C：福島県にお願いをして、防波堤をさらに高くしてもらいたいな。
C：地震を予知する機械を発明すれば、地震におびえなくてすむよ。
T：日本では地震がたくさん起こり、それに対する備えがあることが分かりましたね。次の時間は、自然災害から暮らしを守ってくれる森林の役割について考えていきましょう。

※社会への関わり方について、現実的ではない選択・判断がなされてしまっているにも関わらず、教師はどんな考えも認めてしまい、教師主導で次の課題を提示している。

これから目指したい社会科授業

【導入】

- T：あ！津波市の洪水だ。（洪水の写真を見て）
T：ここであらして行くのは大変そうですね。
C：自然災害は大変だけれど、津波市の人は水害を防ぐ工夫をしながら水を農業や観光に生かしていたよ。
C：どの地域にもその土地ならではのデメリットがあるけれど、メリットに変えてくれているんだよ。
T：デメリットをメリットに変えろと言ったけれど、自然災害は繰り返し起きていますよ。（年表を提示）
C：自然災害をなくすことはできないけれど、被害は減らせろと思う。そうでないと、福島県で津波に備えた防波堤をつくっている意味がないよ。
T：自然とどうつき合っていけばよいのでしょうかね。

【展開】

- C：地域によって起こる災害が違うと思うから、まずはそれを調べる必要があるのではないかな。
T：どうしてそう思うのかな。
C：前に日本の地形について学習したけれど、火山がなければ噴火は起こらないし、大きな川がなければ洪水は起こらないよ。
C：日本には寒い地域もあたたかい地域もあるから気候によっても起きる自然災害は違うよ。
C：理科で台風の動きを学習したよ。沖縄や九州では台風の被害も大きいのではないかな。
T：社会科で学んできたことや理科で学んだことを生かして考えていますね。では日本各地でどんな自然災害が起きてきたのかを調べてみましょう。

【終末】

- T：自然災害に対してどんな対策がありましたか。
C：沖縄県では台風に向けて「自主防災組織」をつくるように呼びかけているよ。
C：福島県では国と協力して津波の被害を減らすためにマツを植樹しているよ。
C：長野県でも地滑りを防ぐのに植樹をしているから、木には災害を防ぐ力があると思う。調べたら防災のひみつが分かるのではないかな。
C：4年生の時に、地域で自然災害から暮らしを守ることを学習したけれど、国や県も同じだね。
T：防災についての共通点も見えてきましたね。では、日本の自然災害やその対策について、学んだことを自分の言葉でまとめましょう。

地形や気候により起こる自然災害もちがうことが分かりました。でも、被害を減らすために国や県が協力して対策をしています。〇〇さんが言った「木が災害を防ぐことにつながる」ということを調べていきたいです。

授業改善の視点

【学習指導要領の改訂を意識した授業】

今回の学習指導要領改訂では、各学年の内容を3つの枠組みとして整理するとともに、自然災害時における地方公共団体の働きや地域の人々の工夫・努力等に関する指導の充実を図ることが示されています。第4学年では「現代社会の仕組みと働きと人々の生活」の内容として、県内等で発生した自然災害を取り上げます。地域の関係機関や人々による自然災害への対処や備えを通して地域社会について理解することがねらいとなっています。一方第5学年では「地理的環境と人々の生活」及び「現代社会の仕組みと働きと人々の生活」の内容として、国土において発生する様々な自然災害を取り上げます。自然災害と国土の自然条件との関連を通して、国土の地理的環境を理解することがねらいです。自然災害を扱う単元でも、各学年のねらいが違うことを十分留意し、授業をつくる必要があります。

【系統的な視点や教科横断的な視点を意識した授業】

学習指導要領の総則では目標の実現に必要な内容等を教科横断的な視点で組み立てていく重要性が示されています。第5学年の「わたしたちの生活と環境」を始め、多くの内容が理科等の教科等との関連を図ることができるとともに、他教科等の授業ではどのような学びをしているのかを把握しておくことで、教科や学年を超えた学びの実現につながっていくと言えます。

子どもたちが前学年まで、また第5学年になって社会科でどのような学びをしてきたのかということ念頭に置くとともに、他教科等の授業ではどのような学びをしているのかを把握しておくことで、教科や学年を超えた学びの実現につながっていくと言えます。

教師が系統性を意識して、学びをつなぐことが大切になります。

単元を通して、資質・能力を育成する

【単元同士のつながりを意識した授業づくり】

本単元は第5学年の最後に学習することが想定される単元です。一般的な単元の流れとして、なぜ第5学年では、国土の様子から始まり、食料生産、工業生産、情報について学習した上で、本単元を扱うのかを考えて授業づくりをする必要があります。社会科で学ぶのは、わたしたちがくらす社会そのものと言っても過言ではありません。教師が、わたしたちがくらす社会をぶつ切りにして、一つ一つの単元に置きかえて提示するようなイメージで授業を続けていると、子どもたちは主体的に関わろうとはしないはずで、単元同士のつながりや順序性を意識した授業づくりが大切です。最後の単元だからこそ、これまでに学習した、国土の様子や食料生産、工業生産、情報の学びを生かして考えることができるように、教師は教材を準備したり、問い返しをしたりしていくことが望まれます。

【子どもの声を単元に生かす】

教師が主体となって単元を構想していると、子どもたちは「自分が調べたいことではないのにな」「先生が言ったから調べるしかないよ」と主体性を失っていき、教師は子どもの実態や子どもの見だしそうな問いを想定しつつ、子どもの発言やつぶやきを取り上げて、全体へと広めながら、自然に問いをつなげていけるようにコーディネートしていくことが大切です。

ここでは、自然災害と国土の自然条件との関連を捉えるとともに、国や県などが様々な対策や事業を進めていることを捉えられるように単元を展開していく必要があります。子どもの声を単元に生かすことで、また一つ主体的、対話的な子どもの姿につながります。

つまり、大切なことは、子どもたちが見方・考え方を自ら働かせて、社会的事象の特色や意味を考えていくことができるように、教師が意図的に単元を通してデザインすることです。

子どもの学びを見取り、評価する

【学びをつなぐ振り返り】

授業の終末や単元の終末には、子どもたちが自分の学びを振り返ることが大切です。振り返りをする中で、資料を根拠に自分の考えをもつことや、友だちとの対話的な学びにより自分の考えが深まったことよさを実感することができるからです。そのよさに気付くことで、子どもたちは新たな問いをもちながら主体的に次の学びへと歩み出し、社会に主体的に関わっていくこととする態度が育まれていきます。教師としても、学びの軌跡を見取り、評価につなげることができるだけでなく、子どもたちの新たな問いを基に、次の単元を構想することで、子どもたち主体の学びが広がっていくこととなります。

【単元を通して、資質・能力を評価する】

学習指導要領の改訂により「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点で評価することになります。「指導と評価の一体化」という言葉にあるように、評価とは成績をつけるための判定だけを指すものではありません。評価規準を設け、単元の中で計画的に評価していくことが大切です。評価を通して見取った子どもの姿を、次の授業でさらに輝かせるためにはどのような働きかけが必要かを考えることで、成長を促していきます。単元を通して、目の前の子どもたちが成長したと実感できるのは嬉しいものですし、評価を生かしていけるような授業づくりや単元づくりを目指していきたいものです。